



パークハウスには常に誰かがいて、
子どもたちは広場で遊んでいて親御さんが来たりしている。
世代間の交流が生まれています。

ーコミュニティパーク事業を始めたきっかけは？

私たちがコミュニティパーク事業を始めたきっかけは、福岡市が考えている事業趣旨とは逆の入り方だと思いますよ。もともとこの公園には老人憩いの家が建っていたんですが、それが移転したときに「公園にも集まれる場所が欲しいよね」ということで、パークハウスを建てるためにはコミュニティパーク事業を始める必要がある、そのためには委員会を立ち上げる必要がある、というところから始まっていきました。

とはいえ、もともと公園では愛護会が活動していたし、夏祭りや餅つきをして活用していたので、このために特別なことをしたわけではありません。公園では花見や避難訓練もしていて、いろいろ活用していますよ。

ーコミュニティパーク事業を始めて、行政手続きなどでメリットはありましたか？

市に申請すれば、可動式のベンチなども置けるようになったのはよかったですね。藤棚の下にたくさん置いていますよ。

花見を開催したとき、福岡市役所に申請して公園内でバーベキューをしたんですが、「この公園では自由にバーベキューしていいんだ」と勘違いされてしまう危険があるなと感じました。だから我々も「福岡市役所に許可をもらってバーベキューを行っています」と責任をもって強く示していかないと



いけないですね。勝手にやっていいんだと思われてしまうと危ないので。

福岡市役所との交流が増えて密に連絡をとるようになったので、適切な方法で申請できるようになったけど、度々報告も求められるようにもなりましたね（笑）

ーパークハウスの利用状況はいかがですか？

パークハウスでは特定の目的で占有するサークル活動などはできないけど、集まっておしゃべりするためによく利用されています。老人憩いの家は校区の家、ハウスは町内の家という感じ。町内の人は、老人憩いの家に移転して遠くなったので、こっちに来ているようです。

ハウスができて一番よかったことはトイレが使えるようになったことですかね。屋外トイレだと管理できないけど、屋内で管理人もいるので綺麗に保っています。あとは夏祭りなどはやりやすくなりました。炎天下では置けないものを冷房下で保管できるので。



ーパークハウス内にカフェがありますね？

令和元年5月にパークハウスを開所しましたが、翌年にはコロナ禍で閉鎖したので、2年間は使えない状態でした。2年間閉鎖したあと「再開したらなにやろうか？」となって、カフェをやってみようとなりました。令和4年の6月に始めたから、もうすぐ2年になります。

カフェはボランティアによる2人体制で運営していて、日曜以外は開いています。パークハウスが開所したとき、管理を地元の老人クラブにお願いしたんですが、ある日の女性担当者が「今日は私が管理の番だから、みんなでハウスでお昼ごはんを食べよう」と友達を誘ってワイワイと。隔週くらいのペースで集まっていたんですが、その女性グループがいまのカフェボランティアの主力になってくれています。

男性も話し相手が欲しいときに「コーヒー飲まん？」と気軽に誘っています。一人暮らしの男性にとってはこういう場所は集まりやすいみたいですね。

カフェを開始した当初はそういったグループが一日4~5人来てもらえればいいなと考えていたくらいですが、ふたをあけたら月に400人も来てくれています。赤字をどう補填しようかと危惧していましたが、その心配がなくなりました。

子どもはテラスで遊んでいますね。ハウス内には大人がたくさんいるので、中まで入るのは勇気が



いるようです。中でジュースを販売することも検討しましたが、お小遣いをもっている子どもと持っていない子どもがいるのでやめました。親子で来るときは、親だけ中に入って、子どもは外で遊んでいます。

ハウスでもインターネット回線を引いてwi-fiを飛ばせば、もっと子どもの利用も増えるのではないかと検討しています。テレビは一度置いてみましたが「ここはテレビを見に来る場所ではなく、おしゃべりする場所」ということで撤去しました。

パークハウスには常に誰かがいて、子どもたちは広場で遊んでいて親御さんが来たりしているので、世代間の交流が生まれています。挨拶したり、しつけというと大げさだけど「こういうことしたらいかんよ」「ごめんなさい」というような会話も生まれています。子どもにとっても「ここには誰かがいる」と安心しているようです。

ー公園の維持管理はどうしていますか？



月に1回清掃や草刈りをして、半年に1回剪定もしています。毎朝やっているラジオ体操に来た人が終わった後に掃除もしてくれています。公園愛護会がそのままパークハウスの運営委員会に入って引き継いでくれているので、新たに人を集めたりといった苦労はありませんでした。運営委員会のメンバーは、愛護会、ボランティアグループ、自治会などから複数名が出て計9名です。

運営委員会の会議を毎月ハウス内で開催しています。通常は当月のイベント情報を共有するぐらいですが、課題があれば話合っています。

ーすごく良いサイクルが回っているようですね。

この団地は50周年で、最初に30代で移り住んだ人がいま80歳以上。町内の高齢化率は40%を超えています。年齢層が高齢化しているのも、運営メンバーに困らなかった要因だと思います。働きに行っている人は、運営に携わりにくいでしょうし。

もともと団地ができたときからみんなで集まって家でバーベキューをしていたので、集まってワイワイする感覚が残っているんだと思います。

ーパークハウスの建設費や運営費はどうされていますか？

団地内の汚水処理施設の修繕費としてみんなで積立てをしていたので、ハウスの建設費用にはその積立金を充てました。補助金も使わせてもらいました。本当は平地に建てたかったけど、更地にするお金を削ってしまったので、高台に建築してしまいました。下駄箱の位置やトイレの仕様など「ああすればよかった」という点はいろいろあります。

活動資金は、自治会からお金を出してもらって運営しています。そこから修繕費用も積み立てています。建てるときにも自己資金が必要ですが、修繕費や撤去費も必要なのはしっかり認識しておかなければなりません。こういったことについて、コミュニティパーク事業をやっている地域同士で意見交換ができればいいなと思っています。



ー地域コミュニティの状況はどうか？

うちの自治会は9割以上の方が加入しています。いまは新しく転居してきた人を自治会に誘っているところです。外国の方も住むようになっていて、新規組で新しいコミュニティができています。公園だけでなく、いろいろなところでコミュニティができて地域が活性化していくといいですね。そういうコミュニティから自治会の次の役員候補が出てきてくれたらいいなと思っています。

団地に最初に移り住んだ世代の子どもたちはいま40代くらいだけど、なかなか戻ってこないですね。もともとサラリーマン世帯が多かったのも、その子どももサラリーマンになっていて、新しい場所で住居を構えているみたいです。最近は空き家も多くなってきました。



ーどうすればコミュニティパーク事業を広げていくことができますか？

愛護会のある公園であればどこでも始められると思うので、もっと申請してくれたらいいですね。最近、市が各校区を対象にコミュニティパーク事業の説明をしていたので、そういう形でもっといろいろな団体に知らせてもらえたら、参加数も増えるんじゃないかな。

地域によっては、100年前から住んでいるグループと新規に移り住んできたグループと一緒に住んでいて、無理に事業を進めようとする返って溝が広がったりするかもしれないですね。うちの団地のように、新しく造成された団地であれば、みんな新しく一斉に住みはじめて年齢も近いので、事業を進めやすいかも。まずはそういう地域をターゲットにして、広げていったらどうですか。

昔は二世帯三世帯が同居していたけど、いまはそうではないので、こういうハウスが世代間の交流の場になると思います。子どもにとっても親にとっても、頼れる場所や逃げ場になると思うので、そういう活用方法もあるのではないのでしょうか。

公民館だとエリアが大きすぎるので、自治会レベルでケアできるコミュニティ形成の場としてPRしてもいいかもしれません。いろいろな使い方をご提案いただけるともっと広がっていくと思います。

(お話を伺ったお相手)

下月隈中央公園コミュニティパーク運営委員会

会長 山下 健児さん

事務局長 秋山 勇司さん

下月隈団地自治会1区会長 永瀬 枯緑さん

下月隈団地自治会2区会長 諸藤 美由紀さん

